

はじめに

富士通アーカイブズのコーナーでは、隔号で富士通についてのあれこれをご紹介させていただいております。第八回は、富士通にとっての大きなターニングポイントの一つである「国際互換路線への転換」についてご紹介いたします。

1970年の終わり、富士通はコンピュータ事業において重大な選択を迫られていました。選択肢は二つ、従来の「独自路線継続」か「国際互換（IBM互換）路線への転換」かでした。

1. 独自路線で国産コンピュータメーカートップに

1960年代前半に他の日本メーカーが米国企業との技術提携を推進する中、富士通は自己技術による独自路線を貫いていました。1965年に発表したFACOM230シリーズは好評を博し、1968年に国産メーカーの中で、トップシェアになりました（外資系メーカーを含めた国内トップシェアは日本アイ・ビー・エム株式会社）。1961年度に4億円強だった情報処理機器の売上高は1969年度には540億円弱へと増加していました。

2. 全く売れなかった米国市場

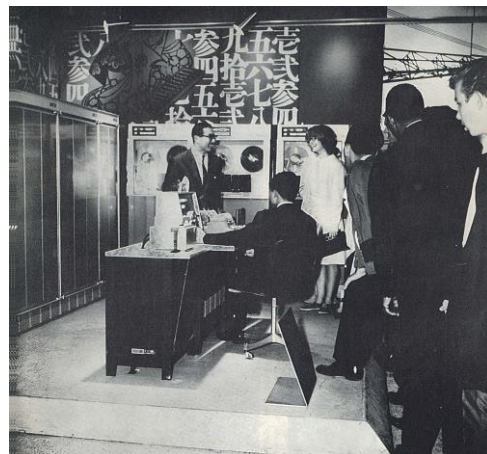
一方海外では1963年に国産コンピュータの輸出第一号となるFACOM212をフィリピン国防省とマニラ国税局に納入しました。1965年にはブルガリアからFACOM230-30を20システム受注する大型商談がまとまりました。しかし、1964年にはニューヨーク世界万国博覧会で好評だったFACOM231について、ニューヨーク万博の後、ASI（オートメーション・サイエンス）社とアメリカの一部の州に限定した独占販売権供与の契約を締結しましたが、全く売れず1年間で契約は打ち切られました。IBM社のコンピュータが標準となっている市場では、互換性のあるコンピュータでなければ輸出が困難であることを痛感させられました。

国際互換路線には大きなリスクがありました。新機種の開発がどうしてもIBMの動向に左右され、そのうえで価格性能比に優れたコンピュータを遅れずに開発することは困難と考えられていました。

さらに1971年7月、日本政府が電子計算機の自由化方針を決定しました。このため技術力、販売力、資金力等で圧倒的に優位なIBM社等の外国企業と対等の立場で激しい競争を強いられることとなりました。



FACOM230-30



NY世界博でのFACOM231展示

3. リスクを恐れず国際互換路線へ

このような状況下で、次機種開発に着手する決断の時が迫っていました。当時の第六代社長高羅芳光は従業員に対して「自由化により、海外の企業がこぞってわが国市場をめざしてきます。当社としてはこれらの外国勢を国内で迎え討つだけでなく、現在の国内市場を失わずに海外市場を吸収していくという、守りよりは攻めの積極的姿勢が肝要であります。」と訴え、国際互換路線への転換を決断いたしました。

1971年、富士通は株式会社日立製作所と提携すると共にアムダール社に資本参加し、新シリーズのコンピュータ開発を開始しました。これがFACOM Mシリーズです。1976年に1号機を日本揮発油株式会社（現日揮株式会社）様に納入しました。以後順調に売上を伸ばし、1979年度コンピュータ売上高で、日本アイ・ビー・エム株式会社を抜き、ついに国内トップへと躍進いたしました。

それまで成功していた路線を変更することは難しいことです。しかし世の中が大きく変化する時にはお客様の要望に寄り添って新しい路線に挑戦することが必要なこともございます。

富士通は常に変革に挑戦し続け、お客様への価値提供を追究して参ります。



1975年11月開催
日本電子計算機ショーに出展されたM-190



M-190

4. 富士通の歴史見学施設

富士通沼津工場には、歴史に触れる施設として、『富士通アーカイブズ』の展示エリアやコンピュータの発展に寄与した池田敏雄を紹介する『池田記念室』があります。是非、ご見学にお越しください。

富士通はこれからもみなさまとともに成長し、社会的使命を果たして参ります。ご支援、ご愛顧いただきますようよろしくお願い申し上げます。

『富士通アーカイブズ』の見学をご希望される場合は、営業までお問い合わせください。